

令和6年度 大田区立南六郷小学校 自己評価 報告書

○ 本校の概要

令和7年3月3日

○児童数323名(8月30日現在)、学級数11学級、大田区理科教育推進拠点校
○学校全体は落ち着いた雰囲気である。
○校内研究では、「他者や地域に関心をもち、探究的に学ぶ児童の育成～教科「おたの未来づくり」に向けて～」というテーマを掲げ、総合的な学習の時間を中心として取り組んでいる。
○全校をあげて「早寝・早起き・朝ごはん」に取り組む、マラソン大会や体育での持久走、長縄跳びの実践を通して、児童の体力向上を目指す。
○計画的な朝学習や補習指導、日々の授業改善などにより、学習内容の基礎基本の確実な定着と思考力・表現力の育成を図る。

○ 自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	方向性	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標	成果評価	これまでの取組 今後の改善策	評価	人数	学校関係者記入欄 コメント			
生予個 き測別 る困目 力難標 をな1 育成未 来社会 を創造 的に	社会の様々な課題を自分事として捉え、主体的に考え、他者と協働し、問題解決していく意欲や、予測困難な未来社会を切り拓いていくために重要な創造力や課題解決力、情報活用能力を育成します。	①STEAM教育等の教科等横断的な学びや科学教育を推進し、課題解決力や新たな価値を創造する力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	4	保護者アンケート「学校は、特色ある教育活動を行っている。」に肯定的な回答	4: 80%以上	肯定的評価:70.2% ●理科教育推進や情報活用能力育成などの特色ある教育活動に取り組んだが、保護者への周知や教育活動への参加・参観の取り組みが十分でなかった。次年度は、これらについて学校HPなどから重点的に情報を発信するとともに、可能な限り教育活動への参加・参観の機会を増やしていく。 ○次年度よりスタートする大田区独自教科「おたの未来づくり」科について、目的や内容を教員が理解するとともに、区から講師を招いて研究会を実施し、見通しをもって活動を企画運営することができた。 ○理科に関する事象や器具、生物などの校内掲示や、毎月1～2日朝時間を使得って行う理科博士などを通して、理科教育推進拠点校として学習環境の整備拡充と理科授業力の向上を図ることができた。	A	4	○今後も特色ある教育活動を保護者や関係者により周知を図っていくとよい。 ○STEAM教育との言葉を聞くが、その教育において理科教育を優先的に充実できれば、物事の根幹を理解する力を養い、それを他の教育面・分野に応用されていくと思う。 ○STEAM教育の実践や体験学習から、将来社会で役立つための貴重なスキルを身に付けられることと思う。次年度から始まる「おたの未来づくり」科でも楽しく学ぶことができるよう期待したい。 ○理科博士や、生き物に関する階段への掲示など、理科教育推進拠点校として特色ある教育の実現に努力している。児童も放送や掲示物に大変興味をもち、よい刺激を受けているように見受けられる。 ○なぜ保護者への周知が十分でなかったのか。学校HPからの発信で改善されるのか。 ○講師を招いての研修会は、専門的な知識や新しい視点を得るよい機会であり、教育の質を向上させるために重要である。 ○展示、生物の紹介は、児童の興味を引き、学びを深めると考える。 ○学校で学んだことを学校以外の活動に活かしている姿が見られると感じた。放課後ひろばでの活動の際に、学校で勉強したことを話してくれる児童が多く、また理科に関する新しい本を放課後ひろばに増やしてほしいという要望もあるため、理科教育推進拠点校として取り組まれていることが児童の学習意欲につながっていると思う。			
			3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			3: 70%以上					B	5	
			2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。			C							0
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。										
		4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	D	0									
		3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。						4	0				
		2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。											
		1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。											
		④理科教育推進拠点校として、理科学習環境の整備と拡充、理科授業力の向上を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。		2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。					1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	1: 60%未満
		3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。	4	0									
		2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。											
		1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。											
お世個 お界別 と目 をつ標 担な2 うがる 人材国 際を育 成都市 します	英語での実践的なコミュニケーション能力を高めるとともに、我が国や郷土の伝統文化に触れ、尊重する心や、協力していく態度を育成します。また、国際社会・地域社会に関心をもち、持続可能な社会を形成していく態度を形成します。	①外国語教育指導員の活用などにより、英語に慣れ親しみながら会話をする機会を増やし、英語力やコミュニケーション能力の向上、豊かな国際感覚の育成を図っている。			4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	4	児童アンケート「英語を使って、あいさつや簡単な会話ができる。」に肯定的な回答	4: 80%以上	肯定的評価:80.6% ○OGC(おたのグローバルコミュニケーション)のプロジェクトマップを使用した外国語授業を実施し、児童が英語に慣れ親しみながら会話をする機会を増やし、教材開発を推進していくことができた。 ○エコキャップ回収活動などを通してSDGsについて児童に考えさせ、自分にできる活動を行わせていくことができた。 ●我が国や郷土の伝統や文化を学ぶ学習をさらに推進し、児童が生活している地域に誇りをもち、生涯大切にしていきたい姿勢を育んでい必要がある。	A	6	○これからも日本の伝統や文化を見直し、誇りをもたせる教育に取り組んでほしい。 ○こどもたちが英語に親しみ、会話を楽しむことは子らの将来にとって良いことである。早くから英語に馴染み、単語や文法を頭の中で日本語に翻訳せず、英語は英語のまま理解させるために、OGCが有効な方法となると良い。 ○エコキャップ回収活動は、身近なことから取り組むという点で大切なことである。 ○これから先の豊かな国際感覚の育成を図るために、OGCの推進とSDGsの活動に今から興味をもって実践できるように期待したい。 ○エコキャップの回収など、児童にも分かりやすい切り口で取り組んでいると思う。 ○児童の英語での実践的なコミュニケーション能力は、現代社会において年齢と能力のつり合いが取れているのか考える必要がある。SDGsについての活動としてエコキャップの回収があるが、昔から変化が感じられない。学ぶことは、児童が生涯にわたって大切にしてい価値観や姿勢を育むことにつながる。郷土・伝統・文化に誇りをもち、それを今後も大切にしていきたい。	
			3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。	3: 70%以上	B			3					
			2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。	C									0
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。										
		4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	D			0							
		3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			4			0					
		2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。											
		1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。											
		③現代社会における地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて考え、行動する力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。		2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。				1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		1: 60%未満
		3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。	4	0									
		2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。											
		1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。											
④OGC(おたのグローバルコミュニケーション)を推進し、区教育研究会外国語活動部会と連携しながら教材開発を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。	1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	1: 60%未満	D	0			
3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。	4	0											
2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。													
1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。													
た一個 め人別 のひ目 基と標 礎り3 がな個 る性力 と能力 を育成 を發揮 する			児童・生徒が豊かな人生を生きていく上で基礎となる力として、豊かな心や確かな学力、健やかな体を育成します。また、乳幼児期から中学校までの一貫性のある教育を推進します。	①道徳科を中心とした各教科等での学習などを通じて継続的に道徳教育を実施し、豊かな情操や道徳心の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	4	保護者アンケート「学校は、道徳の時間の指導や学級指導等を通じて、やさしく思いやりのある子の育成に向けた「心の教育」に力を入れて取り組んでいる。」に肯定的な回答	4: 80%以上	肯定的評価:84.1% ○「早寝・早起き・朝ごはん」について学校全体で取り組み、推進週間には生活カードを配布して生活習慣の確立を図り、教員の意識が向上するとともに保護者にも活動を啓発することができた。 ○マラソン月間の取り組みを中心に、運動習慣の確立に向けて学校全体で取り組んでいくことができた。 ○道徳の時間などを中心に、日常的に児童の自己肯定感や自己有用感を高めていくことができた。 ●主体的に運動に取り組ませることについてほぼ全員の学級担任が達成できたが、できなかった教員に対しては指導助言を行っている。	A	7	○目標達成に向けての工夫が見られる。特に、道徳の時間を今後も深めていってもらいたい。 ○学校現場では、児童の生活指導やしつけといった本来家庭で担うべき役割が学校に求められる傾向が強まっている。こどもたちの家庭環境は多様であり、一律の対応は求められていないと考えるが、挨拶から始まり、社会性・公共性の育成を重点的に捉えたいものである。 ○マラソンを通じて運動する習慣を身に付けるように取り組んでいる。運動に苦手意識のある児童は特にマラソンが苦手なため、運動が苦手な児童でも運動習慣が身に付く多種目・競技についても取り組んでいくと良い。 ○推進週間が成功した後も継続的な取組が必要だと考える。マラソンを通じて運動習慣を促進することは、身体的健康だけでなく、精神的な健康や集中力の向上にもつながると考える。運動習慣が定着し、健康的なライフスタイルが育まれるよう今後も取り組んでいくことが必要である。日々の指導の中で、児童一人一人の成長を支え、自己肯定感・自己有用感を高める工夫を重ねてくださり素晴らしいことである。今後も児童が自信をもち、前向きに成長できる環境をつくるためには、関わりや声かけがとても重要である。 ○児童館でも思いやりなどの話をするところがあるが、話をしているこどもたちの中から「学校でもそうだ」という声を聞くことがある。そのことから、学校での取組の習熟を図ることができた。 ○外遊びなどの体を動かす活動に積極的な児童が多いため、普段の学校生活から運動に親しみをもってもらうために工夫がされていると感じた。	
	3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。	3: 70%以上			B			2					
	2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。	C											0
	1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。												
	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。			D		0							
	3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。				4			0					
	2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。												
	1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。												
	③体育や保健体育の授業など様々な機会を通して、健康教育や食育を推進し、基本的な生活習慣の確立を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。		3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。		2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。				1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		1: 60%未満
	3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。	4		0									
	2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。												
	1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。												
④乳幼児期から中学校まで円滑な接続を行うため、保幼小の連携や小中一貫の視点に立った教育を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。		3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。		2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。	1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	1: 60%未満	D	0			
3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。	4	0											
2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。													
1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。													
⑤「南六小スタンダード」を基本とした基本的生活習慣の確立と、「早寝・早起き・朝ごはん」の定着を図っている。			4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。	2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。	1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	1: 60%未満	D	0			
3: 80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。	4	0											
2: 60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。													
1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。													

学 校 別 力 ・ 標 教 4 師 力 を 向 上 さ せ ま す	校内研究等のOJTの充実を通して、教師の授業力を向上させます。また、質の高い教育を実現するため、学校の組織的な運営力を向上します。あわせて、教師がやりがいをもって働くことができる魅力的な環境づくりを進めます。	①児童・生徒一人ひとりの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の視点による授業改善を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	児童アンケート「学習した内容がよくわかる。」に肯定的な回答	4:80%以上	4	肯定的評価86.7% ○授業改善プランを生かした授業の実施や校内OJT研修の活用など、教員が研鑽に励んでいる成果である。 ○毎学期の授業観察時に全教員が課題をもち、年間を通して課題解決に向けた授業力向上に取り組むことができた。 ●教員の欠員により、今年度は3～6年生で算数少人数指導を実施できなかった。ゆっくり習熟する児童への手だてが少なかったため、理解が十分でない児童が増えている現状がある。	A	5	○働き方改革の中で目標に向けてのご苦労がよく見られる。 ○学校教育においてビジュアル教材を活用して事象を理解することは、人手不足、教育者不足の現代に矛盾することはないでしょう。 ○10月から「学校だより」「学年だより」を統合することにより、業務の適正化に取り組んでいると思う。 ○OJT研修の取組は、教員の専門性を高めるために非常に重要である。教員が励んでいる姿は、児童にも良い影響を与えると思う。課題をもつことで、改善点が明確になり、成長が期待できる。教員欠員の中、理解が不十分な児童に対して、家庭でも学びをサポートすることも必要だと考える。親子で一緒に考えたり調べたりすることで学びが深まると思う。学習サポートの方法が分からないことや時間がないことが問題点として考えられる。
		②教職員がそれぞれの専門性を生かしたり、地域の特徴を生かしたりして教育活動を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		3:70%以上			B	4	
		③教職員の業務適正化等に取り組み、児童・生徒に教員が向き合う時間を確保する等、ウェルビーイングを高める取組を行っている。	4:「おおむね高まっている」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむね高まっている」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむね高まっている」と回答した。 1:「おおむね高まっている」と回答した教員が60%未満であった。	4		2:60%以上			C	0	
		④教職員がそれぞれ課題をもち、年間を通じて課題解決に向けた授業力向上に取り組んでいる。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		1:60%未満			D	0	
た 自 個 め 分 別 の ら 目 学 し 標 び く 5 を い 支 き 援 い き ま す と 生 き る	困難のある児童・生徒一人ひとりの状況にあわせて教育環境を整えるとともに、相談機能の充実を図ることで、すべての児童・生徒が自分らしくいきいきと生きるための学びを支援します。	①インクルーシブ教育システムの構築に向けて、教員の資質・能力の向上や校内における支援体制の充実、特別支援教室巡回指導教員との連携等を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	児童アンケート「自分にはよいところがある。」に肯定的な回答	4:80%以上	4	肯定的評価83.0% ○学校いじめ防止基本方針に基づいていじめ発生時の対応マニュアルを作成し、いじめの事前防止と早期発見に努め、いじめや不登校に対して教員一人で抱え込まずに組織的に対応することができている。 ○気になる児童に対しては細かにケース会議を開催して情報を共有するとともに、方針を明確にして学校全体で個々の児童に合った指導を行うことができた。 ○今年度、新たに登校支援員を3名補充し、特別支援教室巡回指導教員と連絡を密にしながら支援の必要な児童への校内支援体制を整えることができた。 ●学校生活調査について、結果を出すだけでなく、さらに組織的で具体的な対応策を考えていく必要がある。	A	6	○工夫が見られる。本年度の取組を継続していつてほしい。 ○いじめの問題は、単に学校だけの問題ではなく、こどもたちの生活背景や社会的要因が複雑に絡み合っており、対策は至難である。今後も、指導する教員と協調し、校内での支援体制を整えていく必要がある。 ○大変なことではあるが、児童に寄り添うことは大切なことである。 ○多様化の現代だからこそ、インクルーシブ教育が重要になると思う。その中で、挨拶や言葉遣い、ルールを守ること、そして、生命の尊重の重要性を育んでほしいと願っている。 ○教職員不足の中、特別なサポートを必要とする児童が多い一方で、より細やかな対応が求められている。登校支援員の新配置などの体制を整え始めている。地域との連携を更に深めることで、新たな人員の確保は十分可能と考える。 ○児童と日常的にコミュニケーションを取ることで、いじめの兆候を発見することができ、早期に対応することができ。匿名で気軽に相談できる窓口があることも有効ではないかと思う。ケース会議で明確にした方針に基づいて、児童の学びや成長を促進することができると思う。増員により、多くの児童に対してサポートの提供ができるようになる。情報共有がスムーズになることで支援の質が向上すると思う。学校生活調査を単に報告するだけではなく不十分であり、調査結果のデータ分析が必要である。 ○いじめについての標語づくりに取り組み、いじめ防止について児童に考えさせるきっかけづくりを行うなどの工夫がされていると感じた。
		②学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見、早期対応等のための組織的な対応を実施している。	4:「組織的な対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満の教員が回答した。 2:60%以上80%未満の教員が回答した。 1:「組織的な対応ができた」と回答した教員が60%未満であった。	4		3:70%以上			B	3	
		③スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携等、児童・生徒・保護者が相談しやすい環境を整備し、一人ひとりの能力や可能性を最大限に伸ばすことを意図した指導や支援を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		2:60%以上			C	0	
		④日々の細かな見取りと報告・連絡・相談により、個々の児童に合った指導と組織的な支援を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		1:60%未満			D	0	
安 柔 個 心 軟 別 な で 目 教 創 標 育 造 6 環 境 な を 学 習 空 り 間 ま す と 安 全 ・	学校施設について、ICT環境等の教育環境の整備を推進するとともに、児童・生徒の安全・安心を向上させるための教育を推進します。	①学校や地域の伝統・特色や、安心・安全な学校生活づくりを踏まえて、学習環境を整備している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	保護者アンケート「学校は、児童が健康・安全に過ごすことができるよう、安全管理や校内環境の整備に努めている。」に肯定的な回答	4:80%以上	4	肯定的評価86.8% ○「オクリンクプラス」を積極的に授業に取り入れ、タブレットを有効活用した授業を全教員で実施することができている。 ○授業改善や「凡事徹底」について、教職員の意識は高い。校内OJTのみならず自主的な研修に参加する教員が多く、このような取組が、授業力向上や当たり前のことの徹底実施につながっている。 ●タブレット端末については、リモート授業時になくってはならないという利点がある反面で、家庭で依存しがちになったり書くことを億劫がったりするマイナス面もある。タブレット使用に関するルールの見直しが必要である。	A	6	○教員のスキルアップを図りながら、タブレット端末の利用によるマイナス面を見直し、考えていく必要がある。 ○「オクリンクプラス」を授業に取り入れる現代の教育は、時代の要適とはいえず、驚くべきことである。(幼児でもタブレット端末やゲーム機を使っているのですから。) ○時代とともにインターネットの時代でもあるが、書くことも大事な学習であると感じる。 ○煙体験の実施など、関係機関と連携して災害に対する教育を行っている。児童にも「お・か・し・も」の周知が徹底されている。 ○素晴らしい取組であり、学習の質を向上させるだけではなく、児童の興味を引き出す効果もある。学校全体の教育水準の向上、授業力向上、児童に対する指導の質の向上につながっている。タブレット端末は、リモート授業において非常に重要なツールであるが、その使用には注意が必要と考える。書くことを避ける傾向が見られるのは教育現場において考慮すべき課題である。
		②避難訓練や安全指導日などを通して、危険や災害に対する教育を関係機関と連携しながら進めている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		3:70%以上			B	3	
		③学習者用タブレット端末や学校図書館を活用した指導に取り組んでいる。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		2:60%以上			C	0	
		④安全点検を毎月実施し、学校施設における危険防止と早期発見・対応に努めている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		1:60%未満			D	0	
学 地 学 校 校 域 校 域 を コ ・ 目 つ ミ 家 標 コ ・ リ ニ ・ マ テ 地 す イ 域 の 核 連 と 携 し ・ 協 働 に よ る	地域コミュニティの核としての学校づくりや地域の特色を生かした学校づくりを進めるとともに、学校・家庭・地域が連携・協働して、地域社会全体でこどもたちを育成します。	①「地域コミュニティの核としての学校づくり」を目指して地域と学校が連携・協働した様々な活動を実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	保護者アンケート「学校は、学校だよりや学年だより、学校ホームページ等を通じて、学校の教育目標等を家庭に伝えるとともに、教育活動に関する情報を提供し、家庭との連携の強化に努めている。」に肯定的な回答	4:80%以上	4	肯定的評価88.1% ○学校の様々な教育活動について細かに学校HPなどを通じて保護者・地域に発信し、周知を図った成果が表れている。 ○校内の情報担当者がホームページ更新の計画表を作成し、定期的に情報を発信していくことができた。 ●地域教育連絡協議会では資料を作成して評価に必要な情報を共有したが、教員への周知が足りずに内容が十分に伝わっていない。どのような資料を用いているかを、教員に周知していく。	A	7	○地域、特に町会は人材不足である。今後は、よりPTAと連携した地域コミュニティづくりを希望する。 ○学校のホームページでの発信は、ご年配の方にとっては操作方法などで難しい面もあるが、時代の流れでもあって若い世代の保護者はスマートフォンやタブレット端末を用いることに長けているので、良い手法だと思う。ご年配の方には、今後も紙面での情報提供を続けてほしい。 ○先生と一緒に作り上げた素晴らしい学芸会だった。 ○今まで同様、学校・家庭・地域が連携し、情報の共有ができたら良いと思う。 ○夏のわくわくスクールを通じて、児童が地域の方から様々なことを学んでいる。当日、手伝いをする保護者もあり、こどもを通じてコミュニティへの参加をしている。学校と地域のつながりがより深めることで、学校運営に必要な人材・情報を得る機会になると考える。 ○コミュニケーションの強化に非常に効果的である。教育活動をHPを通じて発信することは、学校・家庭・地域社会との連携が強化されることが期待できる。地域教育連絡協議会でのような資料を用いたのかについて、教員への情報共有も重要である。これにより、次の資料作成や周知に活かすことができる。 ○学校行事へのお誘いや協議会での説明で、学校の強化課題や取組について知ることができた。今後も学校と児童館で情報共有しながら、児童の健全育成の支援をしていきたいと思う。
		②登下校の見守り活動等の、児童・生徒の健全育成や安全指導に係る取組を地域の協力により実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		3:70%以上			B	2	
		③家庭教育に関する情報の発信やPTAなどと連携した講演会・学習会、またはその双方を実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		2:60%以上			C	0	
		④学校の教育活動についての情報を、学校HPや学校だよりなどを通じて定期的に保護者・地域に発信している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4		1:60%未満			D	0	

○記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。
○学校関係者評価の「評価」は、A:自己評価は適切である B:自己評価はおおむね適切である C:自己評価は適切ではない D:評価は不可能である の4点について、評価した人数を記載す